

安永七年

触状控  
戌

九月中旬

口上書

御物頭の内火廻并盜賊改役当分被仰付  
出火の節火場は不及申平日共日夜御  
府中相廻紛敷者は押え候様に尤押候上  
少々人違有之候ても不苦段申渡有之  
候間末々に迄紛敷風躰無之様に可及  
達段御用番被申聞候間被得其意触  
支配方へも可有御達候以上

八月廿九日

藪市太郎

吉海市之丞

志水才助

右の通に候条被得其意寺社方御家人中  
えも各方通達有之下方へも可被達候以上

菊池

九月四日

御郡代中

隈府町理助と申者宗傳次亡父以来数年  
召抱忠勤の者にて候処近年多病に相成候間  
傳次譜代に召抱引受快養育仕度旨にて  
隈府町人畜離の儀傳次方支配方へ相達  
候由にて御郡代衆へ被為取出候依之右理助  
隈府町人畜被差離候て故障有無の儀  
致吟味書付相達候様にと被仰付候左様  
被得相心町方吟味有之否の様子書付を以  
早々可被相達候則傳次願書真浄寺  
紙面共に入披見候条一覽の上早速  
可被差返候以上

九月廿四日

河原長左衛門

隈府町別当

中嶋伊次郎殿

同町庄屋

半右衛門殿

以手紙得貴意申候弥御安泰被成御坐珍重の御儀に御座候然は御支配地菊池郡隈府町居住仕候拙寺支配の牢人宗傳次召抱置候利助と申者右傳次亡父已来今以数年相勤誠に以忠勤を尽一稜と為に相成候処近年多病に相成り候て右傳次快育申度段願出申候右利助儀は親類縁者其外頼方も無之者に候極々無拋筋にて御坐候間何とそ願の通被仰付被下候様に於拙寺も奉頼候則宗傳次願書相添へ指上候条宜御沙汰被成可被下候奉頼候右の段御頼申上度早々如此に御坐候以上

九月十七日

真淨寺

内藤勘左右衛門様

上村 角右衛門様

貴下

奉願口上の覚

私亡父已来召抱置候隈府町利助と申者三十年余今以無懈怠相勤当年五十九才に相成申候然処近年は年罷寄其上多病に相成私方引取申候ては無高者にて居屋敷家宅等も所持不仕身近き親類は勿論引請育呉候様成親類迎も一向無之何分にも渡世の手段無御さ候併右の者儀生得廉直成者にて私家事に付ては昼夜内外の無捨別厚心を用万端費ヶ間敷儀無之様に心を付一稜為に相成候儀は諸人見及居候事に御坐候右の通身分に不相応の心遣甚辛勞仕候故歟近年別て多病にも相成候は難見放已来私譜代に召抱私方へ引受快養育仕度奉存候右の者本方独身者行末頼方無之者にて御坐候間何とそ隈府町人畜被差除被下候様宜御達被成可被下候為其

口上の覚書を以奉願候以上

安永七年九月 宗傳次 花押

真浄寺

以手紙致啓達候弥御堅固に御勤の段  
珍重に存候然は手前地子米弍石五斗  
隈府町中嶋屋伊次郎方へ売渡申候間切手  
前を以右伊次郎方へ御付渡可被下候  
此段為可申達如是に御座候以上

十月弍日 岡深園

河原長左衛門様

覚

菊池郡御藏納隈府町無高

一男老 人 歳五十九 理助

右理助儀宗傳次殿方え亡父代々三十年余奉公  
相勤居申候処近年多病に相成申候得共引請育  
呉候者逆も無御座傳次殿方引取申候得ては  
渡世の手段無御座候然処右の者は一稜為に成候  
者にて難被見放傳次殿譜代に被召抱引請養育  
被仕度由にて隈府町人畜被差離し被下候様に被奉  
願候由依之右理助隈府町人畜離し候ても支  
無之候哉と御吟味被仰付奉得其意候右の者  
隈府町人畜を離し宗傳次殿譜代の抱に罷成候  
ても何ぞ支申儀無御座町方其外何方も  
故障無御座候間何とそ町人畜被差離傳次殿  
譜代の抱に被仰付被下候様に奉願候右理助儀切  
支丹転類にても無御座御改の鉄砲をも所持  
不仕候為其私共連判の覚書を以申上候以上  
安永七年九月 隈府町理助五人組

佐次右衛門

右同 善五郎

右同 幸作

右同 平左衛門

右の通相違無御座候

為其肩書判形仕上候以上

隈府町庄屋

半右衛門

別当

中嶋伊次郎殿

右隈府町の儀は高地に応し申候ては  
人畜多き所柄にて御座候間理助儀町  
人畜被差離候ても支申儀無御座候  
為其肩書印形仕上候以上  
河原長左衛門殿

上村角右衛門殿

御郡方

御奉行衆中 右当ては御郡代殿の当て成

〔付紙〕

〔本行理助儀村人数被差  
放宗傳次譜代の家来に  
相成候の儀被差免候尤  
追て様子も有之譜代の  
家来被差放候之〕「ママ…不用」得は他支  
配等に相成候儀は難成候元々の通  
村人数に加り申筈に候条夫々  
御達可被置候真浄寺方の来状  
等は及返却候已上

十月十四日 御郡方

御奉行中

〔付紙〕

〔右付紙の通候条左様被相心得  
可有其達候以上

十月十五日 上村角右衛門

〔付紙〕

〔右御付紙の通候条左様被相心得  
可有其達候以上

十月十七日 河原長左衛門

柵の儀京都福井作左衛門方焼印有之京  
柵を用來候国々近來猥に成紛敷柵  
取扱候趣相聞候追て作左衛門方方柵改の  
者相廻可申候の間急度相守都て◇〔弦力〕掛  
柵木地柵共作左衛門方の京柵を用可申候  
若於相背は可為曲事候

右の趣五畿内山陽道南海道西海道山陰道  
の内因幡伯耆出雲石見隱岐并壹岐  
對馬都合三拾三ヶ国御領は御代官私  
領は領主地頭を可被相触候  
戌八月

枳改の儀に付田沼主殿頭様被成御渡候  
御書付大御目付中様を被差廻候  
右御書付の趣可相触旨從江戸被  
仰下候則写の別紙相捺「ママ・添」候の間被奉得  
其意触の面々えも可被相触候尤此触状  
可有判形候以上

十月七日

奉行所

右の通候間被奉得其意御判形候て  
御支配方えも可被相触候以上

藪市太郎 判

吉海市之允 判

志水才助 判

右の通候条被奉得其意寺社方  
御家人中直触の面々えも通達有之  
下方へも可被相触候尤此触状可有  
判形候以上

十月十九日

上村角右衛門 判

内藤勘左衛門 判

去八月從 公義御触有之候御尋者の儀に付て  
猶又松平右近將監様被成御渡候御書付  
の趣御國中不洩様に可相触旨從江戸被  
仰下候に付則右御書付写の別紙相添候間  
被奉得其意弥以入念遂吟味不審成者於  
有之は押置即刻可被相達候此段触の面々  
えも可被相触候尤此触状可有判形候以上

九月廿五日

奉行所

右の通候間被奉得貴意御判形候て御支配  
方えも可被相触候以上

九月晦日

藪市太郎

吉海市之允

志水才助

右の通条被奉得貴意寺社方  
御家人中直触の面々えも各々通達  
有之下方えも可被相触候尤判形候て可  
被差返候以上

十月廿六日

河原長左衛門

去六月十五日木挽町五丁目狂言座勘弥  
抱役者幸之助母を殺候躰にて欠致候  
同人召仕文五郎人相書付を以同年八月  
相触候処今以不尋出候先達て相触候  
人相の通の者有之候は、弥無油断相改  
其所に留置曲刈甲斐守番所え可相達候

戌九月

各様人別出銅の儀例の通書付御添  
被成早々私方へ御遣可被成候此段  
為可得御意御連名を以如此に御座候  
以上

十月廿六日

長左衛門

各様御家内七歳以上の男子付早々  
私方迄御遣可被成候右為可得御意御連名  
を以如此御座候以上

十一月三日

河原長左衛門

御尋に付申上る口上の覚

私儀去る十日の晩下川原惣助所にて手遊ケ間敷  
儀仕候等と脇方方御達申上候由にて有筋  
申上候様にと被仰付奉得其意候右  
惣助方えは参不申候尤其夕出はた「端」儀  
右衛門所えは参申候て酒給申候に付給酔  
直に宿本え引取休申候脇方方如何様に申  
上候ても右の通に御座候得は決て手遊  
ケ間敷仕候儀無御座候勿論右躰の  
儀は兼て被仰付候筋も御座候得は相  
慎居申候尤此儀御不審に被思召上候は、  
御達申上候右の手前得と御吟味  
被仰付被下候様に奉願候右御尋に付  
有筋覚書を以申上候以上

隈府町

安永八年二月十八日

吉蔵

右吉蔵申上候通に御座候間  
連判仕上候以上

同町五人組

宇右衛門

夫左衛門

圓助

喜平次

同町庄屋

半右衛門殿

中嶋伊次郎殿

御尋に付申上る口上の覚

去る二月十日の晩下河原惣助所にて手遊ケ間

敷儀仕申候と脇方より御達申上候に付有筋

申上候様にと被仰付奉得其意候右惣助

方えは私儀参不申候手遊ケ間敷儀決して

不仕候毎度御触の趣承届申候脇

方方如何様に申上候とも右躰の儀無

御座候若左様の儀御座候は、如何様

成御、方にも可被仰付候右御尋に付

有筋申上候御不審に被思召候は、御達

申上候者と対決奉願候此段御慈悲

の筋を以宜敷被成御沙汰可被下候

為其五人組連印の覚書を以申上候已上

限府町

安永八年二月十八日

善次

同町五人組

甚九郎

長助

善八

茂兵衛

庄屋

半右衛門殿

中嶋伊次郎殿

菊池郡御蔵納限府町無高御百性「ママ…姓」

一男老人

歳三十二

宇兵衛

右の者去る正月十七日与風「ふと」宿本を罷出候て

罷帰り不申候に付此間親類五人組并町中の者共

方々相尋申候へ共今以行方相知れ不申候最早欠落

仕たるとて申候右の者切支丹転類族にても無御坐  
御改の鉄砲をも所持不仕候尋出し次第早速御達  
可申上候欠落仕候者の儀は日数廿日限り御達し  
申上候様に被仰付置候処追々に尋に罷出候者諸  
御郡方〳〵を懸相尋申候にて罷歸り候儀及延引  
申候に付御達申上候儀及延引奉恐入候此段宜様  
被成御達可被下候為其五人組連判の差出を以  
申上候以上

限府町宇兵衛五人組

安永八年三月

同 源七

同 儀八

同 清九郎

同 七右衛門

同

同町庄屋

半右衛門

中嶋伊次郎殿

河原長左衛門殿

上村角右衛門殿

急に申置候儀有之候間明朝五ツ時前御用宅へ  
可被罷出候若病中差合等有之候面々は  
同列の内代聞にて相濟候間左様に可被相心得候以上

菊池

三月八日

御郡代中

御家人中

大納言様先月廿四日被遊薨御候依之  
御國中諸事穩便可仕旨從江戸被仰下候間  
被奉得其意繕作事の儀は日数七日過仰山に無之  
様に取繕新規の作事は遠慮可被仕候此段  
触支配方へも可被相触候尤此触状可有判形候以上  
三月七日 奉行所  
右の通に候条被奉得其意御判形候て御支配方へも  
可有御達候

三月七日

藪市太郎

吉海市之允

志水才助

右の通候条被奉得其意判形候て可差返候

尤別紙御奉行中々之紙面一通相添候間  
是又被得其意支配方へも不洩様に可被達候以上

三月八日  
上村角右衛門  
内藤勘左衛門

今日方穩便の儀は別紙の通に候依之  
左の通

一 御郡代の儀支配へ罷出諸事穩便に  
申付火用心弥堅入念候様に且又寺の法談  
在町市立の儀は七日の間相止候様

右の通可及達旨御用番被申聞候間此段御同役  
中へ御通達可有之御達候以上

三月七日  
御郡方  
御奉行中

月番

御郡代衆中

右の触状三月十日七ツ時に拝見仕候

明廿一日其町伊兵衛吉郎右衛門喜三次  
御用の筋有之候に付会所え召連罷  
出被申候以上

三月廿日  
河原長左衛門  
庄屋

半右衛門殿

中嶋伊次郎殿

傍示杭御取除又は新規建方被仰付候儀に付  
別紙の通及達候間被得其意御支配方えも可有御達候  
以上

二月廿九日  
藪市太郎  
吉海市之允  
志水才助

右の通候条被得其意御家人中并支配の浪人面々  
寺社えも可有達候則別紙写の通相添申候以上

三月七日  
上村角右衛門  
内藤勘左衛門

右の通被及御達候則写仕懸御目申候

三月七日  
御家人中

鉄砲傍示追々引直に相成候所々左の通

一 託摩郡本庄手永上南部村の村上に傍示杭新規建方被仰付候

一 合志郡大津手永吉原村を南に傍示杭御引直被仰付候に付右吉原村は傍示外に相成候

一 玉名郡荒尾手永鉄砲傍示不残御取除に相成り候に付同郡坂下手永扇崎村を

下沖洲村手合の塘迄傍示杭新規建方被仰付候

右の通追々傍示杭御取除又は新規建方被仰付候事以上

二月

今度御穩便中新規の作事被差留置候得共

来廿一日は新規作事不苦候尤仰山に無之様に

可及達旨に候条此段御同役中へ御通達御支配方へも

可及御達候以上

御郡方

三月十八日

御奉行中

御郡代衆中

覚

一 火用心の事

一 当分渡世の事并に庄屋送り手形の事

一 嫁取婿取の事

一 借家請持面々の事

一 御立川漁留めの事

一 御立山并請藪荒す事

一 御穩便の事

一 手遊の事

一 酒屋入呑の事

一 近国往來の事

一 旅人宿の事

右の條々亥三月廿二日夜町中へ申渡置

者也

此間相触置候穩便の儀明後廿六日迄にて廿七日

方は穩便に不及候間其通被相心得支配方へも可被達候

已上

三月廿四日

此間及御達置候穩便の儀来る廿七日は穩便に不及

候付て御用番被相渡候書付写の別紙相添候間

可被得其意候以上

三月廿四日

吉海市之允  
志水才助

右の通候条被得其意支配方へも  
可被達候以上

三月廿六日

上村角右衛門  
内藤勘左衛門

御家中人中

久々御疎意迄に打過申候弥御別条無御座候段  
得度致承知珍重御事に御座候然は御心安  
御座候に近比以得御意兼申候得共不得已左の  
通に御座候は其御町に居申候伊三次と申者の  
弟五平次と申者去る廿七日かに雇に付て清水の  
出小屋にて隈府町吉蔵と申者其外彼小屋に昼飯を  
預置候に付立寄認候筈にて別て腹中もすき申候  
右昼飯をたへかゝり居候処に小屋の酒を右の吉蔵  
調持来りたへ候様にと申に付殊の外腹内空候右  
昼飯を給候故断申候てたへましき由申候得は此方  
持来り候酒をたへましきとはいかゝと申方  
其所に水荷い棒候を取甚打擲致水荷いの  
竹折候に付又々其所に有之候おけに成候木を取  
五平次を強打申候故肩面部にかけち「血」つよく然は  
最初うたれしゆへにいか躰にも可致様無  
御座候所を出小屋の者共取押へ打候木を取  
申候然共血を打出旁病申候ゆへに其段早速  
役方の衆中へ達候て引取申候由右五平次母親に  
放れ兄弟共世話迄に成居申候てはいかゝに存  
申候て独り操にて暮申候は右躰に御座候ては  
先今日飢に及申事に御座候由歎き申候右五平次  
兄弟共に白木に居候者にて少様子も御座候て  
混度出入仕候一兩日私方へ杖にすかり参候故  
不便の躰に御座候故一兩日止置申候今日は  
罷帰可申候へ共右の躰にて飢にも及可申様子に  
打聞へ申候御心易内には却て此段遠慮に居申候  
へ共御内意右の様子に御座候尤五平次も酒  
たべ候者故に申分迄にて共難得心片口にては御座候  
得共清水出小屋にて取「お・脱力」さへ候者共其外証拠も  
可有御座候間能々御吟味被仰付被下候て拵「かせぐ」  
申候て兄弟共も及難趣不申様に仰付仕被下候

右の心易は一向酒五平次給不申候様子に相聞へ申候  
私及老衰甚手振いしゆへ筆を止居申候へ共  
倅も勤番に居申候故無拋如是御座候不埒  
不文甚可有御座候御賢察賜可被下候以上

四月朔日

松崎

仁三兵衛様

尊書被成下忝奉拝見候被遊御揃益々  
御安康に被遊御座候段恐悦の御儀に奉存候  
次に私儀相替申儀も無御座候乍憚貴  
意易被為御思召上可被下候左様御座候得は  
当月町居申候伊三次弟五平次と申者去る  
廿七日日雇に罷出申候処清水小屋にて  
吉惣と申者と口論仕候て水荷ひ棒等にて  
五平次儀を打擲仕候由殊の外相痛申候  
に付て御屋敷様へ罷上り経営御いとなみ  
申上候に付て御不便に被為思召上有筋の儀  
吟味仕申上候様にとの儀御委細被為仰下奉  
得其意候段々尊公様え罷上り段々御世話  
に罷成申候段忝仕合に奉存候就夫右口論  
仕候吉惣儀急度吟味仕申候処其節の  
様子不法大酒を仕給酔申候に付て一向  
覚へ不申候由其夜小屋に前後不覚  
床居申候処夜中にお楚み「苦しむ」申候ていか成所  
哉と案し申候得ともしぼし相分り  
不申候様子にて漸々と本心に罷成り其  
夜鶏時分にも罷成り申候との儀物語仕候  
事に御座候右に付ては五平次打擲仕候儀も  
一向覚へ不申候殊の外氣の毒に存候様子に  
相見へ申候尤外に一兩人日雇も参居申候得共  
是とても給酔居申候故同人の儀覚へ  
不申候様子に被察申候事御座候右の  
趣に御座候間吉惣儀甚恐入申候右口上書  
仕申候則一書奉入尊覧申候乍憚  
御覽被下候様に奉希申候右の段申上度  
旁尊報如此御座候以上

四月五日返事 上町仁平次に為持白木

御屋敷に遣す

尚申吉惣儀猶今五人組中に預け置申候  
同所友立の儀に付吉惣方断り申候様に仕候て相済め

申度乍憚奉存候右に付御内意御伺申上候平日  
吉惣儀給酔者に付一向白黒の相分りも被無御座もの  
に御座候乍憚万端御察可被下候様に奉存候何様  
其内奉期拝顔万々可申上候以上

御吟味に付申上る覚

合志郡水坂山方材木隈府町え出方御座候を隈府町  
五平次嘉次衛門又太郎并私都合四人にて右材木請持  
出約束仕候て持出居申候処に永々の日にて殊の外  
私共草臥居申候間志水酒場にて酒給居申候処  
殊の外何れも給酔申候て前後不覚の様子にて  
此節色々仲間中口論ケ間敷罷成候互に打  
擲仕候様にも覚申候然処に右五平次儀を  
私打擲仕候様に白木御屋敷へ罷越申候て  
御屋敷様へ申上候由にて其節の様子申上  
候様にと被仰付奉得其意其節の儀は  
右に申上候通にて草臥柄にて酒を給申候得は  
前後不覚の様子にて右四人の者共互にうつ  
うたれつ仕候由にて御座候是迎も得斗は  
覚不申候万一右五平次儀を打擲仕候儀も  
可有御座哉と奉存候右躰の儀も覚不  
申候得共左様の儀も御座候は、宜敷様に  
被仰聞御屋敷様方へ幾重にも程宜敷  
様に被仰上可被下候右御吟味に付有筋  
覚書を以申上候以上

隈府町

安永四月

吉蔵

中嶋伊次郎殿

横町伊左衛門儀五人組へ御預け置可被成候若  
五人組へてつとふなど仕申候は、五人組方  
打つけ押へ置可申候此儀五人組中へ申付  
可被成候以上

四月廿一日

伊次郎

又左衛門殿

上町七兵衛儀御用の筋有之候間五人組共に  
召連其元御出可被成候以上

四月廿一日

伊次郎

又左衛門殿

大納言様二月廿四日薨御右御日柄慎有無  
の儀御様子未相分不申候依之追て申達候迄は  
先十二日廿日慎之通可被相心得候此段触支配方  
へも可及達被付御用番被申聞候間可被得其意候  
以上

四月十五日

吉海市之允

志水才助

右の通候条被得其意寺社方御家人中へも  
各様可有通達候以上

四月十一日

上村角右衛門

内藤勘左衛門

右の通被及御達候則御紙面写仕懸御目に  
申候以上

五月二日

河原長左衛門

御家人中

松尾社御修覆為御見分御郡代

上村角右衛門殿御儀今日方御出在  
被成候直木野本分村に御入込にて  
御座候此儀為可得御意如此に  
御座候以上

五月七日

河原長左衛門

一中町伊三次五月十日暮本に五人組中へ  
預け置申候

五月十日

御国方他所え出候米穀其外品々共に増  
運上銀被仰付候節其已前改を請定の  
運上相納置候分は各別其余は一切増  
運上無之候ては出船難成御定候処近年  
右の節々或は旅人え売渡置亦是  
過半致船積候なと々色々願出追ては  
出船甚致遅滞も有之猥に相聞候依之  
以来弥以御定の通増運上被仰付候の節  
其已前改を請定の運上相納置候分は  
出船被仰付其外色々願出候共決て難  
叶候条問屋共も兼て右の趣相心得  
居候の様船着の所々え不洩様に御達

有之候様御同役中え可有御通達候以上

御勘定方

四月廿三日

御奉行中

内藤儀左衛門殿

筑紫丹右衛門殿

林七郎右衛門殿

右の通候条左様被相心得問屋共え其段  
可申付置候以上

四月廿四日

上村角右衛門

式朱判の儀世上通用相増候ため吹方申付  
去る辰の年々金を同様取遣皆式朱判にても  
可致通用旨相触候処当時にては吹高も相  
嵩候に随ひ主に式朱判のみを取遣いたし小判  
小粒は相貯候様相成候ては金銀取交世上  
通用融通のため式朱判吹方申付候詮も  
無之候間弥金を無差別取交皆式歩判にても  
致通用金と式朱判の無差別心得違無  
之様可致候若金を困置候様成儀も於  
有之は急度咎可申付候

正月

右の趣江戸町々国々えも可触知者也

式朱判通用の儀に付松平右近将監様  
被成御渡候御書付大御目付中様方被差廻候  
右御書付の趣可相触旨從江戸被  
仰下候付則写の別紙相搦「ママ・添」候間被奉得  
其意触支配方へも可被相触候尤此触状  
可有判形候以上

四月廿五日

奉行所

五月廿六日御郡代方御触状参

大納言様御法号孝恭院様と奉称候右御日柄  
慎の儀先達て及達置候処今度別紙の通江戸方  
被仰付越候条被奉得其意末々至迄不洩様に  
奉承知居候様可申聞旨御用番被申聞候条被奉  
得其意御支配方へも可有御達候以上

「貼紙 下の部分」

五月廿七日

吉海市之允

右の通候条被奉得其意寺社方御家人中へも各々  
通達有之下方へも可被達候以上

五月廿九日

上村角右衛門  
内藤勘左衛門

右の通被及御達候条別写仕掛御目申候以上

「貼紙 下の部分 終わり」

「貼紙」

「 二月廿四日

右毎の月御当日音曲鳴物殺生仕間敷事

正月廿四日

御征月にて候得共前条御日柄慎にて相濟候事

以上

亥の四月

五月晦日

河原長左衛門

御家人中

各様例年御達被成候御奉公付今明日中に

私方迄御出可被成候此儀為可得御意御連名を以如此に  
御坐候以上

五月晦日

河原長左衛門

御家人中

各様方御奉公付未御出不被成候間達方成兼申候間早々

私方迄御出可被成候必御延引無御坐候様に御出可被成候  
此儀為可得御意如此に御座候以上

六月二日

河原長左衛門

御家人中

衣服御制度の儀先年被仰付置候通

堅可相守儀勿論候処輕輩の内には心得

違の者も有之哉に相聞候弥以堅相守

候様被申聞猶役頭／＼方常々も心を可被付候

一火廻并盜賊改被仰付置候御物頭中え

右御制度改をも兼帯ニ被仰付於途中

紛敷衣服等着用の者見掛候は、男子は

其姓名女は何某家類と申儀承糺申

筈に候条此段も夫々可被相達置候以上

六月朔日

覚

衣服御制度改の儀に付て御用番方被

有御渡候書付の写御奉行中と被相  
渡候に付則右の写各え相渡候条被得  
其意御家人中直触の面々其家類に  
至迄心得違等無之様各方可有通達候  
尤下方衣服之儀は不及申弥以心得違の  
者等無之様町在役人共方心を付候様  
可被申付候以上

菊池

六月五日

御郡代中

右の通御座候間別紙御書付共に写仕  
懸御目申候以上

六月九日

河原長左衛門

此者式人為商売近国え罷越候往来  
無異儀御通可被下候以上

田代領山口町

安永八年亥六月 別当桜井七郎右衛門  
所々

御改衆中

右の者六月十三日方廿日迄逗留尤浄土  
宗にて肥前国田代山口野両寶寺旦那に  
其紛無御座候以上

問屋

善十郎

上村角右衛門

右は山本山鹿え所替被仰付山鹿両  
手永専に相勤候の様被仰付候

内藤勘左衛門

右は菊池両手永相勤候様に被仰付候  
片山甚十郎

右は菊池合志に所替被仰付大津竹迫  
専に相勤候の様被仰付候

右の通今日被仰付候間左様被相  
心得寺社方御家人中えも手永限  
各方通達下えも可有達候以上

七月朔日

内藤勘左衛門

右の通被及御達候間写仕懸御目  
申候以上

七月二日

河原長左衛門

御郡代衆は被仰聞各様え申通候儀  
御座候間明後十二日朝五ツ時河原会  
所え御揃可被成候此儀為可得御意御連名  
を以如此に御座候以上

七月十日

城潤次

河原長左衛門

切支丹宗門の儀毎年如申入候無懈怠  
可被有御改候尤来春奉公人出替の  
時分新参は不申及居続并譜代の者  
男女共八歳以上は日本南蛮の誓詞  
書物旦那坊守の裏書判形被取置  
諸事に被入御念可被相改候将又年々從  
五月九月迄は異国船次第に参居  
至十月帰帆の事候間弥可被入御念  
自然不審成者於有之は即刻と  
御奉行所へ可被申上候從前々被  
仰出候彼宗門の者見出聞出於訴人  
の輩は御褒美可被下旨候条面々  
召仕被申候末々男女至迄堅可被申付候  
右の趣毎御触候方へも可被相触候  
尤此触状可有御判形候以上

安永八年七月七日

類族御改所

右の通候条御判形にて御支配方えも  
可被相触候以上

石寺甚助

吉海市之允

右の通に候条判形候て御惣庄屋方は  
下方えも可被相触候以上

七月十二日

片山甚十郎

内藤勘左衛門

判 判

鉄砲傍示引直に相成候所々左の通

一 飽田郡池田手永柿原村

一 玉名郡小田手永桜井村

一同郡坂下手永岩崎村

右三ヶ村不殘傍示外に相成申候

一 飽田郡五町手永河内村

一 玉名郡小田手永竹崎村

一同郡坂下手永高瀬町

右三ヶ所は不殘傍示杭新規建方被仰付候  
一玉名郡坂下手永下沖須村と扇崎村鍋村  
濱田村迄

右四ヶ村傍示外に相成申候

右の通傍示杭取除又新規建方被仰付候間

左様に御心得此段御支配方へも可有御達候以上

七月三日

石寺甚助  
吉海市之允

右の通候条被得其意御家人中へは各々

可有通達候以上

七月十日

片山甚十郎  
内藤勘左衛門

右の通被及御達候則写仕及通達申し候  
以上

七月廿五日

河原長左衛門

御家人中

山本山鹿所替

山鹿専

上村角右衛門

玉名

井沢慶助

菊池専

内藤勘左衛門

合志専

片山甚十郎

阿蘇南郷

坂根長右衛門

野津原蘂崎

渡辺善右衛門

菊池合志所替

右の通今日所替被仰付候間左様に御心得  
御同役中へも可有御達候以上

七月朔日

御郡間

右の通に候間左様に被得相心寺社方御家人中へは  
各手永限可有通達候以上

七月八日

菊池  
御郡代中

右の通被及御達候則写仕及通達候  
以上

七月廿五日

河原長左衛門

御家人中

御郡代詰間致出来候に付来る廿三日より日勤  
被仰付候段被及御達候間朝四ツ時より八時迄  
の内は各々被達候儀直詰間に可被相達候  
各も詰間に被罷出候得は御用談不支候間

左様可被相心得候右為可申達如此候以上

菊池

七月十七日

御郡代中

追て右の趣寄々御家人中えも手永限  
可申通候以上

右の通被及御達候間御紙面写仕懸御目  
申候以上

河原長左衛門

志水才助儀大御奉行被 仰付御足高

五百石増被下置座席小笠原備前

次座に被付置江戸詰御家老役被

仰付旨先月十八日於江戸被 仰渡候

此段為御存知申達候条御同役中え

えも可有御通達候以上

御郡方

七月廿日

御奉行中

右の通候条為存知申達候寺社方

御家人中へも各方可有通達候以上

七月廿三日

片山甚十郎

内藤勘左衛門

右の通被及御達候間御紙面写仕懸御

目申候以上

七月廿八日

河原長左衛門

口上書

来月十六日 隆徳院様三十三回御

忌被為当候に付御取越同月五日御

逮夜方六月迄於妙解寺御法事

御執行被仰付候に付五日六日諸事相

慎火用心等弥入念候の様堅可被申付候

則御法会刻限の書付相添候且又

六日御寺え被相詰候面々は御法会相済

退出の節拜有之筈候其外の面々は

半上下着御中小姓以上并組に不入御中小

姓迄可有参拜候尤七時以後は参詣

無用候此段触支配方へも可被相触候

以上

七月廿四日

奉行所

右の通候間被得其意御支配方えも  
可被相触候以上

七月廿五日

石寺甚助

吉海市之允

御法会刻限付

五日

宿諱

九時

六日

献粥

八時

饑法

八半時

半齋

五時

以上

片山甚十郎殿御儀明早朝竹迫会所方

此元へ御移り被成直に各様へ御対面被成候由

御坐候依之各様明朝五ツ時此元会所へ

御揃被成候様に御出可被成候此元濟次第

深川え御移り被成筈に御坐候間御急き

御出可被成候尤礼服御持せ被成候て可有御坐候

此段為可得御意如此に御坐候以上

八月九日

河原長左衛門

御家人中

口上書

御老中松平右近将監様先月廿五日

御卒去被成候御到来有之候間今日方

日数三日諸事穩便可被相心得候尤繕作

事等は相止候に不及候此段触支配方へも

可被相触候以上

八月十六日

奉行所

乍恐再応奉願口上の覚

大坂吉野五運調合三臈圓と申薬先年

九兵衛方売方の儀奉願候処に他所薬商売

の儀は御禁被為置候に付願筋不被為叶

段被為仰付奉畏候然処に再応奉願候

儀恐多奉存候得共右三臈圓の儀甚功能

の薬にて先年願書差上候儀段々諸方え

相知其後近所は勿論遠方方態求に参

申候得共他所菓御法度被為仰付置候に付  
売方の儀難成段申聞候得共諸人も甚  
残念に奉存候依之何とそ売方の儀御免  
被為仰付被下候様宜敷被遊御達可被下候  
為其重畳乍恐再忘口上の覚書を以  
奉願候以上

隈府町九兵衛跡

安永八年九月

忠平判

同町庄屋

半右衛門殿

同町別当

中嶋伊次郎殿

河原長左衛門殿

内藤勘左衛門殿

御郡方

御奉行衆中

付札

此儀他国の売菓一統被差留置候得共  
本紙三臓圓各別功能有之候由に付  
別段を以願の通被差免候尤在中にて  
振売等は難叶候条夫々可有御達候  
已上

御郡方

九月

御奉行中

此儀相達候処右付紙の通候条可有  
其達候已上

菊池郡

九月

御郡代中

此儀右付紙の通候条左様被相心得  
可有其達候以上

九月

河原長左衛門

聊完「ママ…宛」人別出銅例年の通御書  
付御添被成私方え御遣可被成候  
御延引無御座様に奉存候此段  
為可得御意御連名を以如此に御  
座候以上

十月九日

河原長左衛門

御郡代衆内藤勘左衛門殿来る十二日  
御出在被成候尤御用宅え直に御入込

の筈に御座候此段御知せ為可得  
御意御連名を以如是御座候以上

十月十日

河原長左衛門

薬種商売の儀に付従公義別紙の通御  
触有之候間写巻通差越候条所々在町え可有御達候  
此段御同役中えも可有御通達候以上

十一月三日

御郡方

御奉行中

長崎表にて近国行と名付商人共手前  
にて落札高の内を残候類同市中遺ひ  
用等の薬種にても相場宜鋪品大坂  
表え相廻し長崎除物と申銘にて  
売出九州西国筋よりも右同様の趣  
にて売懸代等に相渡候類も有之いつれも  
無手抜物にて紛敷候間以来は右の荷物  
買受候は、大坂町奉行所え可相届吟味  
の上出元儲成品に候は、於大坂売買可  
為致候尤江戸表其外諸国方も前書  
の通払底の薬種にて相場宜敷品は  
買戻候節は是又右同様相心得不埒  
売買致間鋪候  
右の趣御料は御代官私領は領主  
地頭より不相洩様可触知者也

九月

覚

一粃種子八升

但元加賀国方越中国に参越中国にて  
名を百万石と申候由

右の粃当年私方え作申候処種子粃少々差上  
候の様尤右種子求候節方収納仕取実米摺  
の儀共に可申上旨被仰付奉得其意候右は越中  
富山二番町小田原屋平三郎と申者商売方  
に付度々当地え罷越申候間彼表へ作候粃の内  
取実宜遅物の打稲に悦敷粃有候は、種子  
少々差越呉候様にと一兩年以前右平三郎へ  
頼置申候処彼地にて百万石と申粃加賀国方  
参越中国にては遅物の打稲の由に付種子粃

式升程大坂問屋を頼当春差越申候に付格別に  
苗仕隈府町内古町と申所にて極々地味宜田方  
五畝程に植付申候処殊の外小出来にて有之外々  
の田方を早く及熟に申候当地の儀冷水にて一  
体遅熟の所物「ママ・柄」故地味に相応不仕小出来にも  
御座候哉と奉存候乍然取実の儀は収納仕候の処に  
右の五畝分に粃式石六斗程御座候間先大底  
の取実と奉存候尤打稻にて御座候右の粃  
諸方を種子貰申候に付分散仕候間粃摺は  
不仕候少々粃搗にて白米へ仕上申候処に粃壺升に  
付白米五合三勺程に相成申候右の見合にて  
米摺も大概には可有御座と奉存儀に御座候  
困置候粃の内右に言上申候通の枅目差  
上申候為其覚書相添申候以上

安永八年十一月

中嶋伊次郎

内藤勘左衛門殿

当今様去る九日

崩御の旨に付御國中諸事穩便に可被

相心得候此段触支配方へも可被達候以上

十一月廿五日

奉行所

右の通候間被得其意御支配方にも可有  
御達候以上

十一月廿五日

石寺甚助

吉海市之允

右の通候条被奉得其意下方にも不洩様  
可被相触候急成儀に付先寺社御家人中  
へも各方可有通達候以上

菊池

十一月廿五日

御郡代中

右の通被及御達候条写仕掛御目申候以上

十一月廿六日

河原長左衛門

御家人中

当就影踏御郡代内藤勘左衛門殿明廿一日  
御出在被成候此段御知せ為可得御意  
御連名を以如此に御坐候以上

正月廿日

河原長左衛門

御家人中

申上候先達て御内達申上置候阿部養元を  
隈府町惣左衛門出入の儀只今妙蓮寺様御出被成  
双方無意念御其分以被成相済申候此段御内々  
御しらせ申上候乍憚宜様奉頼候以上

正月廿四日八ツ時 中嶋伊次郎

河原長左衛門様

中嶋伊次郎

〔第二卷 おわり〕